令和５年度　第１回横須賀市学力向上推進委員会　議事録

１　日時　令和５年７月７日（金）15 時 00 分から 16 時 30 分まで

２　場所　横須賀市教育研究所　第２研修室

３　出席委員
笠原委員・市川委員・庭田委員・太田委員・吉田委員・東委員

４　事務局
学校教育部教育指導課　鈴木課長　小日向主査指導主事　石橋主査指導主事
宍戸主査指導主事　渡辺主査指導主事　北井指導主事

５　傍聴者　なし

６　議事内容
（１）委員長選出
学力向上推進委員会条例第３条の規定に基づき、委員の互選により笠原委員が委員長に指名された。その後、条例第３条３項の規定に基づき、委員長が委員長職務代理者として市川委員を指名した。

（２）諮問
事務局の教育指導課長が、次のとおり諮問事項及び諮問理由を読み上げた。

学力向上推進委員会条例第１条の規定に基づき、下記のとおり諮問する。

１．諮問事項
横須賀市学力向上推進プランに定めた目標の実現に向けた課題および改善策について

２．諮問理由
令和４年度に「横須賀市学力向上推進プラン」を策定し、「学びあう集団の育成を図る」「粘り強く学ぶ力の育成を図る」「学力層全体の引き上げを図る」という３つの目標を設定した。本市の学力向上のために、教育委員会ではこれらの３つの目標および目標指標を各校と共有し、各学校においては学校運営方針等にそった具体的な取組を実施している。
併せて、本委員会においても専門的な視点や学校現場、家庭との連携などの視点からの協議や学校訪問等を通して推進プランの進捗状況について認識を深めていただいている。しかし、学校現場での学力向上に向けた取組や成果にはまだ

まだ課題があり、それらの課題を特定し、改善策を打ち出す必要がある。
　そこで、学校の現状や児童生徒の学びの様子、今年度の横須賀市立小・中学校学習状況調査および全国学力・学習状況調査の結果の分析等から、横須賀市学力向上推進プランに定めた目標の実現に向けた課題および改善策について答申してくださるよう、ここに諮問する。

（３）事務局からの説明

　事務局から、次のとおり今年度の学力向上推進委員会の取組について説明し、質疑応答を行った。

■事務局

　本市では、参考資料１の教育振興基本計画（第２次）前期実施計画に基づき、令和４年度から参考資料２の学力向上推進プランをスタートさせた。このプランの４ページをご覧いただきたい。これからの予測困難な時代において通用する「確かな学力」を身に付けるためには、児童生徒が学びに対して主体的に取り組み、自分の良さや個性を生かすとともに、他者の多様な価値を認め、協働し合うような経験が大切になってくる。また、自らの学びをふりかえって調整したり、あきらめずに粘り強く学ぼうとしたりする力を育成していくことが重要になる。

　そこでこのプランでは、３つの目標を設定した。これらの目標の実現にむけて各学校と目標を共有し、取組を進めているが、学校現場の取組や成果にはまだまだ課題がある。それらの課題を特定し、改善策を打ち出すことを考えている。

　資料４をご覧いただきたい。今年度は２（２）のとおり年間４回の会議でご協議いただき、推進プランの実現に向けた各学校への助言や教育委員会の取組に関する答申案を作成していただきたい。具体的には、次回は市学習状況調査等の結果の分析について、第３回は坂本中学校と桜小学校の学校訪問、第４回は各校の取組状況等について協議したいと考えている。

　また資料５は、資料４を踏まえた年間のスケジュールだが、この推進委員会以外に学力向上担当者会が年２回ある。それらも連動させながら学力向上に向けた方策を検討していただきたいと考えている。

■委員長

　この件について、今の段階で確認したいことがあればご質問を伺いたい。

■委員

　11 月 15 日に予定されている第３回の坂本中学校・桜小学校への学校訪問について、実際の授業を観るのか、それとも話を聴くのか。

■事務局

　実際の授業は観る予定だが、今回は１日で２校を回るので、具体的には詰め切れ

ていない。今日のご意見を踏まえて検討していきたい。

■委員長
　昨年度、実際に学校の状況を見たうえで、このプランがどのように実践されているのか、日常の授業から我々が見取る形式だった。今年度も同じような趣旨になるのか。また、昨年度は小と中で２回に分けていたものを１日で小・中どちらも観る形にした意図はあるのか。

■事務局
　坂本中学校は本市の研究委託校であるため、参観をしていただきたいと考えた。また、今年度の会議スケジュールでは、第２回に学習状況調査の結果についての協議を入れたいことから、学校の授業を観ることができるのは第３回しかない。隣接する小学校も見ていただくことで小中の学びのつながりも見ていただきたい。よって１日での学校訪問を設定している。昨年度は 45 分および 50 分の授業をじっくり見たが、今年度は全学年の授業を均一に観る形にしたいと思っている。休み時間の様子なども参考になると思うので、ご意見をいただきながら詰めていきたい。

■委員長
　授業を観ること、学校を参観することはけっこうなエネルギーが必要になる。なんとなく観るのではなく、小中同時に観ることも踏まえながら、今後の協議の中で整理し、目的をもって学校を訪問させていただきたい。その方向でよろしいならば、その話題になったときにぜひ建設的な意見をいただき、小中を参観する意味を生かせるようにしたい。
　それでは資料４・５についてはよろしいか。同時に委員の皆様には、年間スケジュールを念頭においていただき、ご自身やご自身の学校などで参考になるものがあれば準備をしていただき、参加をしていただきたい。では資料４・５については以上とする。

（４）協議
　委員長の進行で、「①担当者が課題として捉えた結果について、それぞれの立場から読み取れることは何か」、「②横須賀市の学力向上をさまたげている要因や、その背景には何があるか」の２点について協議した。

■委員長
　もう一度資料３の諮問事項をご確認いただきたい。何度かの会議を経て向かう最終的なゴールは、横須賀市学力向上推進プランに定めた目標の実現に向けた課題及び改善策についてである。事務局には学力向上推進プランに定められた目標の実現がまだまだなされていないという認識がある。なぜ実現に至っていないのか、背景や構造的な問題について整理をし、具体的な改善策を示していくことが我々の役割

である。重要な役割であり、ばらばらの視点で話し合っても最後にまとまりがつかなくなってしまうため、問題を構造的にとらえていく必要がある。学校の課題としては、授業者の指導や、今求められている授業改善の内容について理解が十分でない側面も考えられる。地域性の問題もあるだろうし、教育委員会の施策に問題があることも考えらえる。いくつかカテゴリに分けてご意見をいただき、整理できれば次につながっていくと思う。

担当者が課題としてとらえた結果について、それぞれの立場から読み取れることはなにか、横須賀市の学力向上を妨げている要因や背景には何があるのかについて、まずは、授業者レベルでの問題という視点でご意見をいただければと思う。

資料６をご覧になってどのようなところに注目されたのか、その理由とともに伺いたい。

■委員

「やはり」と思った。児童生徒の意見を広げたり深めたりすることについて、自校でも「本当にこれで意見が広がっているのか」と感じることがある。学びあう集団の育成を図ることについても、生徒が主体的・対話的に授業に臨むことができているのか、教員自身が不安に思っている。話し合ったり、生徒から出てきた問いを課題にしたりしている教員はいるが、この疑問に戻ってきてしまう。なぜかというと、教員が見取ることができていないからだと考える。振り返りシートを書いてみるなどのアドバイスをしているが、本当に意見を広げたり深めたりしているのかな？というのが実感だと思う。ついた力を価値づけるために、どうしていけばいいのかを提案することもできると思う。

■委員

若手教員が増えており、どのように授業を進めるか、初期の段階で悩んでいる場合が多いと感じている。OJT がなかなかうまく機能していない。横須賀市では中堅の 40 代の教員が少ない中で行き詰まっている。教員自身が困り感を持ちながら授業をしているので、子どもたちの困り感になかなかうまく対応できない。この部分で停滞している感じはある。

円グラフの 19 パーセント（指導力・学力観）を改善していくことで、児童・生徒が学びを深めたり、粘り強く学べたりという足掛かりになるのではと考えている。

■委員

自分の意見を広げたり深めたり、粘り強く課題に取り組む部分について、資料７にある子どもたちの意識調査の数値では、「難しい課題に挑戦して取り組む」への肯定回答率が小学生は 80 パーセントを超えていて、比較的高い水準だと思う。子どもたちはそう思っていても、教員側からは粘り強く取り組めていないように見取れる原因について模索する必要がある。

また、自分の意見を広げたり深めたりする、粘り強く課題に取り組むことを、一

授業者や学校としてどのように単元・授業計画として設定していくかが重要である。単元や授業のなかで、そのような場面を設定していないのであれば、子どもたちががんばろうと思っても取り組ませていない教員に問題がある。意識の共有、教員の指導力を上げていくことは大きな部分だと思う。令和４年度のまとめのなかで挙げられている、単元の構想・課題の設定という５つの視点について、各学校がどれだけ共有していくかが重要だと感じた。

■委員

昨日、校内で授業研究があった。若い教員や経験年数の少ない教員の指導案を集めていた研究グループの部長が、「指導案の書き方がわかっていない教員がいる」という話をしていた。書き方については伝えているが、自分事としてとらえられておらず、いざ書こうとしたときに評価規準の書き方などに困ってしまっている。

若い教員と臨任教員が組んで授業をしているとき、教科についてアドバイスをする場面があった。指導案を先輩の教員が一方的に修正するではなく、教科としてどのような資質・能力を育成していくのかを若い教員と一緒に確認していかないといけないと思った。そうすれば、単元構想やそれを見取るためにどういう力をつけたいのか、それに対して子どもたちはどういう学びをすればいいのか、こういう姿があるから、いま子どもたちの学びは深まった、粘り強く取り組んでいるということを見取ることができるのではないかと思った。

この 19 パーセントの部分、割合としては低いけれど、ここが一番の課題ではないか。コロナで授業研究ができなくて困っている教員も多いが、中学校の場合、教科が違うとどこまで声をかけて良いのかわからない。生徒指導面については声をかけやすいが、教科の部分は難しい。教科内で解決するしかなく、その中で若い教員たちが困っているという現状がある。

■委員

子どもたち自身は「粘り強く」「主体的に」学んでいると感じていることが救いである。実際に授業をされている教員からはこのような課題が見えているが、管理職の立場からすると、横須賀市全体の授業の方向が学力向上推進プランや指導主事の指導のおかげで変わってきていることが感じられることである。

ただ、推進プランで掲げた目標に対しては教員がどうしていいのかわからないのが現状である。背景にあるのは、若手の教員が 100 人近く入ってきていること、コロナによる混乱で、じっくりと新しい学習指導要領を読んで自己研究することができなかったことである。若手はまだ自信がなく、中堅層は少ないので、話し合いや研究不足が重なり、みんなが「これでいいのか」と思いながらやっている実態がある。

授業では、一方的に教員がしゃべるのではなく、自分で考えさせて共有させることはほとんどの教員がやっている。ただ、授業でねらうのはそれを深めていくこと。自分の意見を言っているだけでは、形は整っていても一方通行に見える。その話を

うけて自分の考えに取り入れたり、みんなで深めていったりすることはかなり高度なことである。経験値も研究も必要になる。そこまでは至っていないのが現状。自校でも同じような実態がある。

また、自校では昨年度から、評価や単元計画が疎かになっている問題に対して、月に１回の評価確認日を設けた。学年ごとに経験値の高いリーダーがいる。２年目になり、評価確認日から最近は単元構想などを相談する日になってきた。やはりそこが大事。今の単元や次の単元をどのようにしているか、具体的な姿をここで見たいからここを目指したいとか、そのためには単元構想をこのようにしようとか。話し合うことにより若手教員の勉強になる。自信にもなるし、授業の進め方や評価についても発見があり、こうすれば子どもたちの深い学びになっていることが見える、という話が少しずつ上がってきている。教員同士の学び合い、学校独自の研究、ベテラン・中堅の教員が授業や単元構想の段階からどんどん関わっていくこと。ちょっとした時間でも児童指導のことだけでなく、授業に関しても関わっていくことも課題解決に向けた方法の一つではないかと思った。

■委員長

昨日ある小学校の研究会に行った。そもそも、ねらい、めあて、学習問題の違いが捉えられていない現状がある。ねらいとめあての関係、学習課題、１時間の授業でどう整理をして子どもたちに取り組ませるか、授業を観たあとの話というより、指導案そのものや、授業ですること、ゴールの姿、そのゴールまでにこの方法をとる、それはこの学習課題があるから、というストーリーが全然できていない。若手だけでなく、経験のある教員も曖昧だと感じた。これらが明確になっていないから授業が迷走する。

各学校を訪問し、授業を見ている指導主事から見てどう思うか。似たようなことを感じているのでは。

■事務局

私は小学校の授業を観る機会が多い。小学校の教員は、45 分でゴールにたどり着かせたいという思いが強いように感じている。先日見た小学校２年生の生活科の授業で、町たんけんで自分たちの行きたい場所について話しあう場面があった。子どもたちの話し合いなので当然脱線するが、話を最後まで聞き、それについて他の子どもたちにつないでいく授業だった。そういう混沌とした状況だと、失敗させたくない気持ちが強くなり、どうしても教員が前に出てしまいがちだが、その教員はすごく我慢していた。

間違えたり、失敗したり、混とんとした状況が苦手な教員がいるのではないかと、委員の皆さんの話を聞いて思った。実は、子どもたちのそういう姿が大事なのだが、若い教員はきっちり準備をしてそのとおりに 45 分間をこなす授業が多いように思う。これからは子どもたちが考えて答えを出す授業が求められていく。そういった教員の指導の姿勢が大事だと聞いていて思った。

■委員長
How to を求めて Why を二の次にしてしまいがち。「なぜ」そういう授業が大事なのかを教員自身に問いかけていく部分がなかなかない。
皆様からでた意見では、学校組織の問題として校内研究の在り方、日常的な学習にかかわる非連続的な話し合いの場面があってもいいのではないかということ。指導力の問題として若手の教員が不安を感じている部分もある。指導主事が常に学校訪問をしているわけではなく、価値づけてもらえる場面は多くない。経験のある教員も少ない。指導力を高めていく必要性がある。
このあたりが現在出てきている意見。また別の視点から意見があれば。

■委員
横須賀市が目指している学力に関する課題について、教員には浸透しつつあるが、保護者や地域へのアプローチが弱いのではないかと思っている。一番上に保護者と学力観の共有とあるが、傾向として、保護者の感じている学力観が課題になっていることが多い気がする。保護者や地域への発信も一つの手ではないかと感じた。

■委員長
保護者や地域との学力観の共有について、各学校で工夫していることはあるか。

■委員
シラバスを作り、教育課程説明会で全教科分を保護者に渡している。すると「ワークは評価に入るのか」などの問い合わせメールが届く。中学生の保護者は評価についての意識が高く、電話でも問い合わせが入るので、シラバスを常に手元に置いて対応している。教員も意識をし、テストはすべて多重チェックし、７月の評定も全てチェックした。これにより、自信をもってこういう評価をしたと保護者に説明できる。

■委員長
学習改善・指導改善は学習評価につながっているが、我々が本来目指すものは評価ではない。ただ、保護者には、子どもの成長を評価・評定でしか受け止めてもらえない。これらを変えること、特に中学校で保護者の意識を変えることは本当に難しい。全体的な日本の教育構造が変わらない限り、中学校教員にとってはシビアな問題だと思う。
課題としては保護者・地域へのアプローチがあり、教員にはかなり浸透しているというお話だった。ほかに何かあればお願いしたい。

■委員
小学校段階での保護者の意識や興味は、学習よりも生活のほうに重点がある。個人面談では学習についても話をするが、教員側と保護者側で温度差があると日ごろ

から感じている。
　目標には「学力層全体の引き上げを図る」とあるが、引き上げを図りたい層ほど、学習への熱意が低い。学習についてこちらが伝えたいことを提示してものってきてくれない。学校と家庭とで歩みを合わせて子どもの成長を押し上げていくことが難しい場合がある。
　また、小学校では、保護者と担任が学習について話す機会は年２～３回の個人面談のときしかない。それ以外に担任が保護者と連絡を取るときはトラブルの発生した場合などになってしまう。学校側が保護者に対して日ごろからどう学習について伝えていくか、ピンポイントで言っても伝わらないのであれば、日常の取組としてどのようなことができるか検討しなければならない。

■委員長
　小学校と中学校の発達段階の違いもあるし、一律の対応はできないが、保護者の理解や協力がなければ難しい。最終的には学校レベルの問題ではなく、地域もかかわってくる。教育委員会側の施策の問題にも絡んでくるが、そういった部分まで踏み込んだ意見があれば。

■委員
　管理職として校内の授業を見たときに、児童が自分の意見を広げたり深めたり、粘り強く取り組む姿を具体的にイメージできないまま授業をしている教員が多いように感じる。モデルがない中、手探りで授業を行い、迷走してしまう。
　自校は今年度から校内研究で道徳を扱っている。筑波大学の先生を呼び、授業をしていただいた。実際に見たからポイントが分かったという感想が多かった。
　教育委員会から教科等指導員の公開授業の日程一覧をいただいたにも関わらず、自校ではなかなか参加の希望が上がってこなかった。こういう取組があるという発信をもっとしていただければ、観ることで意識が変わる、もっと観よう、という取組が今年度からできるのではと思う。

■委員
　自校では昨年度から、「粘り強い姿」はどういうものか、そのような子どもたちを育てるにはどうすればいいのかを校内研究で取り扱っている。激励して無理をさせることではなく、子どもたちが主体的に動いて最後まで頑張るには、課題設定、子どもが食いつくものを課題にしなければならない。最初から学びが自分事とならない子を出してはならない。35 人に共通基盤や知識を持ち、生活しているうえで実感を得らえるような工夫された教材が大切である。
　昨年度は「みんながわかるところから始めて、興味を持って取り組めば、最後まで取り組めるのでは」という仮説に基づいて活動したが、導入や前段はよくても途中で失速してしまった。今年度は中盤から後半にかけて粘り強さを持続するにはどうすればいいか考えている。話し合いでは、子どもたちが自分で考えて仮説を立て

て交流し、深めていけば興味が持続するし、自分たちの仲間から出てきた意見をうまく取り上げ、みんなで考えていく。そのような展開により子どもの興味が持続し、最後まで頑張ろうという気持ちになる。最後は友達同士で協議して「ここまで解決した」という達成感を得られる。自分だけでは途中であきらめてしまうことでも、友達の力を借りて「みんなでここまでできたね」という達成感と褒められる経験を繰り返し、最後まで頑張れる子が育つのではないかと考えている。

協働する学びはとても大切。達成感を味わえることがよいのではないか、という仮説に基づいて校内研究をしている。この場面でこの子が頑張っていた、この子はすぐには理解できなかったけれど、友達に話を聞いて挑戦していた、という変容する姿を見ていこうとしている。そのようなことを学校全体で共通理解できる校内研究は大切だと思う。

■委員長

人の授業を観ること、自分の授業を観てもらうことはどちらも大切。指導案が略案どころか略々案くらいになってしまっていることが多く、ねらいや全体の単元構成があっても、単元計画がなく、本時の評価規準もない。ねらいがあるのだから評価できるはずなのに、それがない。負担軽減のためと言いながら大事な部分をそぎ落としてしまい、本質が残っていないように感じる。校内研究では、管理職含めて全員で授業を観たり、他校の授業を観に行ったりする機会はあるのか。例えば、小学校の教員が中学校の授業を見に行くような、小中一貫の取組はあるのか。

■委員

横須賀市の取組で小中一貫の日がある。ほとんどの学校が話し合いだけでなく、実際の授業を見合っている。その後の教科の話し合いで、同じことを指導していたとわかることもあり、小中が協働できるような機会はある。

■委員長

そこまでできているなら、次の段階に進んだほうがいいのではないか。同じ算数・数学でも、小学校の教員よりも中学校の教員のほうが専門性は高い。小学校と中学校の教員が指導案を互いに見せ合い、ここまで指導しているから中学校はここから指導してほしい、と言えるような交流はあるのか。

■委員

知らないだろうと思い教えていたことを、生徒から「小学校で習った」と聞き、６年間の学びがあることに改めて気づいた。中学校の学びはその上に積み重なるものだから、生徒たちがどこまで知っていて、何を強みにしていて、何が弱いのかは教えていた小学校教員に聴くのが一番。授業のはじめに生徒たちに小学校で何を学んだか聴くと、多くのことが挙げられる。小学校の学びを生徒たちは覚えている。それを土台にして中学校で身に付けてほしい力を育てている実感がある。

自分の地区では、実際に小学校の授業の仕方などを見て、中学校では何ができるかを考えている段階。生徒たちは学んできたことを身に付けて中学校に上がってきているので、その部分は中学校で見取っていきたい。

■委員長

新しい取組を始めるのは負担感があるが、今までの取組を少し進めていく視点で考えると、できることはたくさんある。自分は社会科で、ずいぶん昔のことにはなるが、地域に関する教材を小中一緒に開発した経験がある。小学校の３・４年生の社会と、中学校１年生の地理の授業で同じ教材が使えるので、１単元作って一緒に取り組んだ。今求められているようなことを過去にもやっている。古くからある問題を新しい方法で解決する。過去にも同じような問題があり、それなりに対応したが、解決しきれていなかったからこそ今同じような問題が出てきている。

今の時代に合わせてどのような解決をすれば、次の時代につなげていけるかという視点で考えることが、私たちに与えられた役割の中で大事なことだと思う。既存の取組を当たり前と考えず、別の視点で捉えると違う取組になるのではないか、ということを見つけていただきたい。

市の研修についても、新たに追加することは難しくても、中身を変えることはできる。そこで工夫を促しても良い。市教委が教員に必要なことはこれですと伝えるよりも、自分たちはこれを学びたい、現場でこうしてもらえると助かるという視点から研修を作ることも大事である。

また、先ほどの話にもあった保護者や地域へのアプローチについては地域によっても大きく変わる。横須賀は多様性に富んでいる。地域に即した対話が必要で、地域に合わせて対応しないと難しいことも多い。それぞれの地域で学校教育活動をされていて、地域にあった対応の仕方や保護者へのアプローチなどがあればこの後、教えてほしい。

ここまで出てきたものを整理してみると、学校組織のマネジメントの問題、これは管理職にかかわることである。校内研究の問題はカリキュラムマネジメントの視点から重要なポイントなので、すべての教員に関係のある問題。研究日だけでなく日常での取組も必要だということ。保護者や地域への周知が不十分である問題。小学校と中学校の発達段階の違いに視点を当てたときの学習環境の整え方、家庭への教育の求め方。小中一貫の取組では、小学校と中学校でお互いの授業を見合うようになったのならば、もう一歩進める取組の検討が必要であるということ。

カテゴリに分けるとこれだけの問題が提示された。ほかにも何かあればご意見をお願いしたい。

■委員

資料６を見ると、基礎・基本の学力の定着が課題であると６パーセントの方が考えている。今の私の学校も、３年前までいた学校も、そして、もしかしたらどこの学校でも、この部分は注目されやすい。学校の中で基礎・基本を高めようとすると、

計算や漢字学習をさせようとするが、これらはたくさんある基礎・基本の中の一部でしかない。

ずっと前からどの教員も計算や漢字学習をさせてきたのに基礎・基本の力が課題と感じているのはなぜか。宿題をノルマ的にやらせたり、合格できない子どもには休み時間にも学習させたりすることがいまだ行われている。今後、この課題について、学力担当として考えていく必要がある。基礎・基本を上げるために計算や漢字をスポット的にやらせることは正解なのか、そうではなく、こんな場面で必要だからと目的意識をもたせたうえでやるのか、校内で考えて取り組む必要がる。自分たちが小学生のころは基礎・基本として計算などをたくさんやらされた。おかげでできるようになったこともあるが、私たち自身はそれで通用してきたかもしれないが、そうではない子はたくさんいる。そこにどうアプローチしていくかは、別の方法を模索していかなければならない。限界を感じている部分である。

■委員長

今後、絶対に外せないことがＩＣＴをどう扱うかということである。１人１台の端末がある今の子どもたちに、基礎・基本をどう考え、どういう方法で、何を身に付けさせるのかということと、ＩＣＴは切り離して考えることはできない。委員の話を聞いていて、私の中で出てきた視点である。

次回は全国学力・学習状況調査の結果を確認すると思うが、それはあくまでも学力の一部。結果を踏まえて今日の議論にプラスＩＣＴについてもご意見いただきたい。今後どう学習に活用していくかも大切である。

■事務局

児童・生徒の自己肯定感の低さについてもぜひご協議いただきたい。各学校でどのような認識を持っているか。他の課題点については小学校から中学校にかけて改善しているが、自己肯定感の部分については小学校から中学校にかけて下がっている。全国と比較しても横須賀の子どもたちの自己肯定感は低い。どこに原因があるのか、子どもたちを見ていて思うことがあれば、ご協議いただきたい。

■委員

各クラスの授業を見て回る中で、子どもをほめる言葉が少ないと感じている。日々子どもはできることが増え、それが当たり前になっていくが、それは「当たり前」ではなく、ほめ言葉を浴びせていくことで、自信を持って次へ進めるのではと思う。子どもが一番評価してもらいたいのは担任教員である。子ども同士の評価もあるが、やはり教員からの評価が大きなモチベーションになる。そこからがんばったことで数値に出たり、友達や親からの評価もついてきたりする。そこまでくれば子どもは自分で進んでいける。

ベースを作る担任との関わりの部分で、教員の指導の在り方が自校の課題だと思っている。授業を回りながら、「できている子に気付いている？」と声掛けをしてい

るところである。

■委員
　教員は真面目で、子どもたちの力を伸ばすために努力をされているが、知識や技能のように結果が出てくるものを重視しがち。できたかどうかではなく、努力の過程をほめることが大事。100 点だからすごい、ではなく、100 点をとるためにがんばっていたこと、100 点じゃなくても努力したところをほめたい。計算や漢字だけではなく、話し合いで答えがでなくても、一生懸命考えていたことのような学びの過程を意識して大事にしてほしい。このことを多くの教員で共有していくことが大事な部分だと思う。

■委員
　自校では昨日合唱祭があった。練習の時、真面目に取り組んでいない子がいたが、もっとこうしようという気持ちが生徒の中から出てきて、それを生徒同士が伝えていた。そして、目標を達成できたときに、「いろいろな先生がほめていたよ。学年の生徒たちもほめていたよ。目標に向けてみんなで取り組んだ結果、人の胸を打つ歌が歌えたね。」と言うことがあった。
　その他で、コロナ禍でマスクを着用していたことで、目しか表情が見えていなかったことも関係していると思う。子どもたちがどういう表情をして授業を聞いていたのかがわからなかった。最近ようやくマスクを外したことで、この子はこういう表情で聞いていたのか、ちゃんと伝わっていたのかとか、逆にあまり伝わっていなかったのかと考えるようになった。私自身の表情も見えなかったことで、怒っているように思われていた。マスクを外し、そうでないことを見てもらえたことで、自分たちのことを認め、良いと思ってくれていることが子どもたちに伝わったように思う。
　中学校は教科担任制であるが、担任には打ち明けづらいこともほかの教員に伝えていいし、チームで子どもたちを支えていく体制ができている。担任だけで背負うのではなく、いろいろな教員がいろいろな角度で子どもをほめることができる。担任が言いそびれたところでも学年の教員からほめてもらえる。担任が一人で抱えず、気負わずにいられるのはいいと思う。

■委員長
　いろいろな学校に行かせていただくなかで、先生方にはもっと子どもたちが有能であることを信じていただきたいと思った。特活など子ども自身での取組や、生徒会や児童会などの自治活動に子ども同士で取り組む中で、お互いに評価をしあうことも大事である。教員が子どもをほめると同時に、子ども同士が相互に認め合える場面も大事だと思う。そのあたりも含めて、次回の結果を受け止め、さらに議論を深めたい。
　以上で協議を終了する。

令和5年度

第1回　横須賀市
学力向上推進委員会

●令和５年（2023 年）７月７日（金）
●教育研究所　第２研修室

【次第】

１　開会

２　委員の委嘱

３　教育指導課長あいさつ

４　委員会出席者紹介　＜自己紹介＞　資料１

５　委員長選出　資料２

６　諮問　資料３

７　説明事項
今年度の学力向上推進委員会の取組について　資料４、５

８　協議事項
①担当者が課題として捉えた結果について、それぞれの立場から読み取れることは何か。
②横須賀市の学力向上をさまたげている要因や、その背景には何があるか。
資料６、７、８

９　連絡

10　閉会

資料１

令和５年度　学力向上推進委員および事務局名簿

（順不同　敬称略）

学識経験者	笠原　陽子	玉川大学　教師教育リサーチセンター　客員教授
保護者代表	櫻井　聡	横須賀市ＰＴＡ協議会　会長
小学校校長会代表	市川　敦義	久里浜小学校　校長
中学校校長会代表	新田　将之	武山中学校　校長
小学校教頭会代表	庭田　佳和	鴨居小学校　教頭
中学校教頭会代表	太田　泰義	久里浜中学校　教頭
小学校教員代表	吉田　健人	鶴久保小学校　総括教諭
中学校教員代表	東　　昭子	大楠中学校　総括教諭
事務局	鈴木　史洋	教育指導課　課長
事務局	小谷　亜弓	支援教育課　課長
事務局	梅谷　尚子	教育研究所　所長
事務局	小日向　真	教育指導課　主査指導主事
事務局	石橋　由紀子	教育指導課　主査指導主事
事務局	宍戸　良子	教育指導課　主査指導主事
事務局	渡辺　真也	教育指導課　主査指導主事
事務局	北井　友理	教育指導課　指導主事

資料２

学力向上推進委員会条例

（設置）

第１条　市内における子どもの学力向上のための取組み等に関し、教育委員会の諮問に応ずるため、本市に地方自治法（昭和22年法律第67号）第 138条の４第３項の規定による附属機関として、横須賀市学力向上推進委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

（組織）

第２条　委員会は、委員10人以内をもって組織する。

２　委員は、学識経験者、市立学校に在学する児童又は生徒の保護者、学校教育関係者及び教育委員会事務局の職員のうちから教育委員会が委嘱し、又は任命する。

３　委員の任期は、１年とする。ただし、補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。

（委員長）

第３条　委員会に委員長を置き、委員が互選する。

２　委員長は、会務を総理し、会議の議長となる。

３　委員長に事故があるときは、あらかじめ委員長が指名した委員がその職務を代理する。

（会議）

第４条　委員会の会議は、委員長が招集する。

２　委員会は、委員の半数以上の出席がなければ、会議を開くことができない。

（委員以外の者の出席）

第５条　委員会において必要があるときは、関係者の出席を求め、その意見又は説明を聴くことができる。

（その他の事項）

第６条　この条例に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会の同意を得て委員長が定める。

附　則

この条例は、平成25年４月１日から施行する。

資料３

横教指　第 18 号
令和５年（2023 年）７月７日

学力向上推進委員会委員長様

横須賀市教育委員会
教育長　新倉　聡

学力向上推進委員会への諮問について

学力向上推進委員会条例　第１条の規定に基づき、下記のとおり諮問します。

記

１　諮問事項

横須賀市学力向上推進プランに定めた目標の実現に向けた課題および改善策について

２　諮問理由

令和 4 年度に「横須賀市学力向上推進プラン」を策定し、「学びあう集団の育成を図る」「粘り強く学ぶ力の育成を図る」「学力層全体の引き上げを図る」という３つの目標を設定しました。本市の学力向上のために、教育委員会ではこれらの３つの目標および目標指標を各校と共有し、各学校においては学校運営方針等にそった具体的な取組を実施しています。

併せて、本委員会においても専門的な視点や学校現場、家庭との連携などの視点からの協議や学校訪問等を通して推進プランの進捗状況について認識を深めていただいています。

しかし、学校現場での学力向上に向けた取り組みや成果にはまだまだ課題があり、それらの課題を特定し、改善策を打ち出す必要があります。

そこで、学校の現状や児童生徒の学びの様子、今年度の横須賀市立小・中学校学習状況調査および全国学力・学習状況調査の結果の分析等から、横須賀市学力向上推進プランに定めた目標の実現に向けた課題および改善策について答申してくださいますよう、ここに諮問します。

資料４

令和５年度　学力向上推進委員会の取組について

１　設置について（資料２）

学力向上推進委員会条例第１条に基づき、市内における子どもの学力向上のための取組み等に関し、教育委員会の諮問に応ずるため、学力向上推進委員会（以下、「推進委員会」）を設置する。

また、同条例第６条に基づき、委員会の運営に関し必要な事項を次のとおり定める。

２　取組内容について

（１）これまでの経緯と、本年度の取組内容について

本市では平成 30 年度から令和３年度まで、教育振興基本計画（第１次）第３期実施計画に基づく前推進プランにより、学力向上の取組を推進してきた。昨年度からは、教育振興基本計画（第２次）前期実施計画（**参考資料１**）に基づく新たな推進プラン（**参考資料２**）をスタートさせている。

本年度の推進委員会においては、推進プランで設定した「学びあう集団の育成を図る」「粘り強く学ぶ力の育成を図る」「学力層全体の引き上げを図る」という３つの目標の実現状況を横須賀市立小・中学校学習状況調査および全国学力・学習状況調査の結果分析や学校視察などから考察し、目標実現に向けた課題および改善策を答申する。

（２）年間計画について（資料５も併せて参照）

５月 11 日(木)	教育委員会定例会、委員決定	○学力向上担当者会（4/28 実施）にて、 推進プラン、今年度の各校の取組について説明
７月７日(金)	第１回推進委員会	○本年度の委員会の取組内容について協議 ・経緯の説明、諮問内容について ・学力向上推進委員会の取組について
９月 21 日(木)	第２回推進委員会	○横須賀市立小・中学校学習状況調査および 全国学力・学習状況調査の結果について協議 ・各目標の経年変化の傾向から ・各目標の校種別の傾向から
11 月 15 日(水)	第３回推進委員会	○坂本中学校および桜小学校の学校訪問 ○推進プランの視点から教育課題について協議 ・学び合う集団の育成を図る視点から ・粘り強く学ぶ力の育成を図る視点から ・学習状況調査の結果の視点から
２月 16 日(金)	第４回推進委員会	○答申 ○学力向上担当者会（12/8 実施）による各校の 取組状況について報告 ○令和６年度の推進委員会の体制の検討 ・次期プランの方向性について

資料５

学力向上推進委員会年間スケジュール

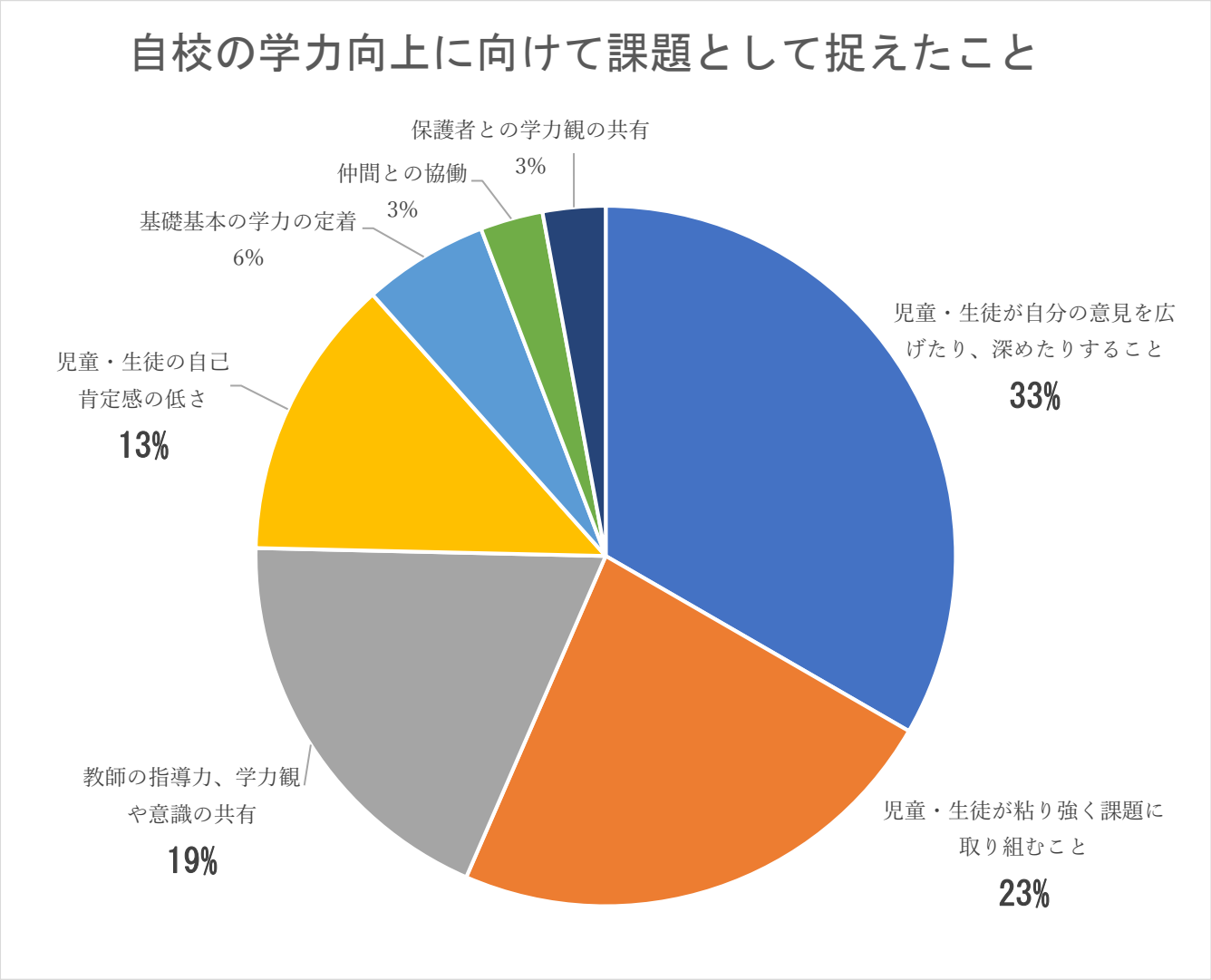
月	名称 時期	内容	事務局
4	学力向上 担当者会 ８日（金）	昨年度の各校の質問紙調査および学調の結果分析および担当者間での情報交換	学調の実施
5			定例会にて委員委嘱議案提出
6			
7	第１回学力向上 推進委員会 ７日（金）	○委員委嘱 ○委員長選任 ○諮問 ○今年度の方向性、年間スケジュールの決定	視察校の決定
8			学調の結果のまとめの作成 第１回の議事録の送付
9	第２回学力向上 推進委員会 21 日（木）	○学調の結果報告 ○学調の結果について協議①	
10			第２回議事録の送付 第２回協議内容のまとめ
11	第３回学力向上 推進委員会 15 日（水）	○学校訪問（坂本中学校、桜小学校） ○推進プランの視点から教育課題について協議②	
12	学力向上 担当者会 ８日（金）	今年度の各校の質問紙調査および学調の結果分析および担当者間での情報交換	第３回の議事録の送付 ①　②より答申案作成
1			
2	第４回学力向上 推進委員会 16 日（金）	○答申 ○学力向上担当者会での各校の取組状況の報告 ○令和６年度の推進委員会の検討内容	
3			第４回の議事録の送付

資料６

学力向上担当者会レポートの課題内容分類（協議資料）

令和５年４月 28 日に市内小中学校の学力向上担当者が集まり、学力向上推進プランの内容を確認し、目標１「学びあう集団の育成」および目標２「粘り強く学ぶ力の育成」に向けて、自校の現状や課題、その改善に向けて取り組みたいことをレポートとして記述した。

その中で課題として記述している内容を抽出し、分類した結果が以下のグラフである。



上記の結果を踏まえ協議内容を以下のように設定する。

①担当者が課題として捉えた結果について、それぞれの立場から読み取れることは何か。

②横須賀市の学力向上をさまたげている要因や、その背景には何があるか。

資料７

横須賀市学力向上推進プラン目標指標　令和４年度の結果

（令和５年度検証の基準値）

目標指標　◆主体的・対話的に授業に臨もうとする意識の向上

指標	基準値	目標値	令和4年度
市学習調査の質問紙調査にて、小5・中2の「授業等の話し合いの活動で、自分の意見を広げたり、深めたりできているか」の肯定回答率が、同一集団の前年度値（小4・中1時）を上回っているか。	小4・中1時の肯定回答率	毎年その前年度を上回る	小4　63.9 中1　71.1
市学習調査の質問紙調査にて、小5・中2の「みんなで課題を解決する場面で協力しようとしているか」の肯定回答率が、同一集団の前年度値（小4・中1時）を上回っているか。	小4・中1時の肯定回答率	毎年その前年度を上回る	小4　85.6 中1　90.2

目標指標　◆自己肯定感の向上

指標	基準値	目標値	令和4年度
市学習調査の質問紙調査にて、小5・中2の「自分のことを大切に思うことができるか」の肯定回答率が、同一集団の前年度値（小4・中1時）を上回っているか。	小4・中1時の肯定回答率	毎年その前年度を上回る	小4　83.6 中1　78.9

目標指標　◆粘り強く課題に取り組む姿勢の向上

指標	基準値	目標値	令和4年度
市学習調査の質問紙調査にて、小5・中2の「難しい課題にも挑戦して取り組もうとするか」の肯定回答率が、同一集団の前年度値（小4・中1時）を上回っているか。	小4・中1時の肯定回答率	毎年その前年度を上回る	小4　82.8 中1　83.1
市学習調査にて、小5・中2の記述により解答する問題の無解答率が、同一集団の前年度値（小4・中1時）を下回っているか。	小4・中1時の無解答率	毎年その前年度を下回る	小4　※ 国語 35.4 算数 22.5 中1 国語 20.9 数学 15.2

※令和4年度については、国語は条件作文の無解答率を、算数・数学は記述によって解答する複数の問題の無解答率の平均値を算出しています。令和5年度の出題内容によっては、別の値を算出して比較することも考えられます。

目標指標　◆学力層の全体的な引き上げ

指標	基準値	目標値	令和4年度
市学習調査にて、小5・中2の正答率 40%未満の児童生徒の割合が、同一集団の前年度値（小4・中1時）を下回っているか。	小4・中1時の割合	毎年その前年度を下回る	小4 国語 15.1 算数 10.6 中1 国語 26.7 数学 12.4
市学習調査にて、小5・中2の正答率80%以上の児童生徒の割合が、同一集団の前年度値（小4・中1時）を上回っているか。	小4・中1時の割合	毎年その前年度を上回る	小4 国語 23.9 算数 38.0 中1 国語 11.9 数学 34.9

目標指標　◆同一集団の経年変化の上昇

指標	基準値	目標値	令和4年度
市学習調査にて、小5・中2の*市の平均正答率の割合が、同一集団の前年度値（小4・中1時）を上回っているか。	小4・中1時の割合	毎年その前年度を上回る	小4 国語 91.4 算数 94.2 中1 国語 93.8 数学 95.9

*市の平均正答率の割合…全国の平均正答率を基準とした市の平均正答率の割合

目標指標　◆全国平均に到達

指標	基準値	目標値	令和4年度
全国学力調査にて、中3の国語・数学が全国の平均正答率に到達しているか。	中3の全国の平均正答率	全国の平均正答率を上回る	※ 国語 97.1 数学 95.3

※全国の平均正答率を基準とした市の平均正答率の割合を、算出しています。

横須賀市学力向上推進委員会

資料８

令和４年度のまとめ

目標１ 学び合う集団の育成を図る

＜目標指標＞
◆主体的・対話的に授業に臨もうとする意識の向上
◆自己肯定感の向上

目標２ 粘り強く学ぶ力の育成を図る

＜目標指標＞
◆粘り強く課題に取り組む姿勢の向上

目標３ 学力層全体の引き上げを図る

＜目標指標＞
◆学力層の全体的な引き上げ
◆同一集団の経年変化の上昇
◆全国平均に到達

学力向上のために、今後も引き続き大切にしたい５つの視点

単元（題材）構想
単元（題材）全体についての見通しを持ち、単元（題材）を通してどのような力をつけたいのかを明確にして単元（題材）を構想する

課　題　設　定
子どもにとって、仲間とともに取り組む意義のある課題、単元（題材）の魅力に迫ることのできる課題を設定する

教師の働きかけ
子どもたちの変容を捉え、子どもの発言を価値付け知識をつなぎ、全体で共有する等、課題解決に向かうプロセスにおける働きかけを追究する

学　習　環　境
一人一人が安心して自分のよさを発揮し、学習のねらいを達成するために必要な活動や豊かな体験ができるような物的環境や人的環境を整える

家庭との連携
家庭と学力観を共有し、ともに自己肯定感を育み、子どもが主体的に学べる関係を築く

令和5年（2023年）3月
横須賀市学力向上推進委員会
（事務局　横須賀市教育委員会　学校教育部教育指導課）

1 計画策定の趣旨

教育基本法第 17 条第２項に基づき、本市の実情に応じ、本市における教育の振興のための基本的な計画である「横須賀市教育振興基本計画」を定め、教育に関する施策の総合的かつ計画的な推進を図ります。

2 計画の位置付け

横須賀市教育振興基本計画は、横須賀市基本構想・基本計画（YOKOSUKA ビジョン 2030）に基づく分野別計画です。

なお、教育振興基本計画の「目指す教育の姿」および「基本的な方針」は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律第１条の３に基づき市長が策定する「教育大綱」に位置付けられています。

3 計画期間

教育振興基本計画の計画期間は、令和４年度（2022 年度）から令和 11 年度（2029 年度）までの８年間です。

なお、基本計画に基づく実施計画の計画期間は、前期実施計画（４年間）、後期実施計画（４年間）に分けています。

横須賀市教育振興基本計画（第１次） H23 ～ R3（2011～2021）・11 年間			横須賀市教育振興基本計画（第２次） R4 ～ R11（2022 ～2029）・８年間	
第１期実施計画 H23~H25 (2011~2013) ３年間	第２期実施計画 H26~H29 (2014~2017) ４年間	第３期実施計画 H30~R3 (2018~2021) ４年間	前期実施計画 R4~R7 (2022~2025) ４年間	後期実施計画 R8~R11 (2026~2029) ４年間

計画の詳細や「横須賀の目指す教育の姿」の英訳版は、ホームページでご覧いただけます。
You can find more information in English about the vision of education in Yokosuka, along with detailed descriptions of our plan above, on the homepage.

田村健「輝け横須賀 Children！」

横須賀市教育委員会事務局 教育総務部教育政策課

〒238-8550　横須賀市小川町11番地
TEL 046-822-9751

令和４年（2022年）２月策定

概要版

横須賀市教育振興基本計画

令和4年度（2022年度）～令和11年度（2029年度）

（前期実施計画を含む）

横須賀の目指す教育の姿

あなたが好き 私が好き 横須賀が好き と誇れる人づくり

あなたが好き

他者理解
多様性　協働性

思いやりを大切に、自分と異なる他者を受け入れる心を持ち、さまざまな価値観を持った人と力を合わせ、助け合える人になってほしいという思いを込めています。

横須賀の教育は、他者理解、多様性、協働性を大切にし、「あなたが好き」と誇れる人を育てます。

私が好き

自己肯定
自立･自律　主体性

自分らしく生きることを大切に、自ら考え、行動し、自分で判断する力や、生涯自ら学び続け、自分を律する力を持った人になってほしいという思いを込めています。

横須賀の教育は、自己肯定、自立･自律、主体性を大切にし、「私が好き」と誇れる人を育てます。

横須賀が好き

郷土理解
地域の人や暮らしの中のつながり

人々と出会い、学び、暮らすこのまちへの愛情・愛着を大切に、地域の歴史や文化、自然を理解し、人と人とのつながりを実感できる人になってほしい、そして、横須賀の良さを、自信を持って発信できる人になってほしい、という思いを込めています。

横須賀の教育を通じ、誰もが自然に「横須賀が好き」と誇れる、そんな姿を目指します。

柱1 確かな学力

施策1 主体的・対話的で深い学びの実現 －個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実－

- 小学校 35 人以下学級の先行実施
- チャレンジアップの支援（英検、数検、漢検検定料助成）
- 国際コミュニケーション能力の育成
- 学習支援員の配置
- 子ども読書活動の推進　など

施策2 学びの連続性を重視した教育の推進

- 小中一貫教育の推進　など

施策3 特色を生かした魅力ある高等学校教育の推進

- 横須賀総合高校における国際交流・キャリア教育の推進
- 部活動の強化育成　など

柱2 健やかな体

施策4 健康の保持増進・体力の向上

- 児童生徒の体力・運動能力、運動習慣等の調査・分析
- 中学校部活動の支援　など

施策5 望ましい生活習慣の確立に向けた支援

- 学校と家庭が連携した生活習慣、運動習慣に関する意識啓発
- 食育の推進　など

柱3 豊かな心

施策6 人権教育・道徳教育の推進

- 人権教育・道徳教育に関する指導力の向上　など

施策7 いじめ・暴力行為への適切な対応

- スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカー・ふれあい相談員・登校支援相談員の配置
- 教育相談による支援　など

柱4 多様な教育的ニーズへの対応

施策8 支援教育の推進

- 支援教育ステーションの開設
- 学習面・生活面における各種介助員の配置
- 医療的ケアの充実
- 病虚弱教室（院内学級）の運営　など

施策9 不登校に関わる支援の充実

- 相談教室の運営
- スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカー・ふれあい相談員・登校支援相談員の配置
- 教育相談による支援　など

施策10 外国につながりのある児童生徒に関わる支援の充実

- 支援教育ステーションの開設
- 日本語指導員・学校生活適応支援員の派遣
- 国際教育コーディネーターの配置　など

柱5 人生100年時代の学び合い

施策11 子どもから高齢者まで年齢を問わず学べる機会の提供

- 生涯学習センターにおける社会教育・生涯学習の推進　など

施策12 学びの成果を生かせる場の充実

- 学習成果の地域での活用　など

柱6 地域の歴史・文化・自然から得る学び

施策13 文化遺産・自然遺産の活用と将来への継承

- 近代化遺産の保存・活用
- 史跡東京湾要塞跡の活用推進　など

施策14 図書館・博物館・美術館における豊かな学びの推進

図書館
- 子ども読書活動の推進
- ICタグ導入による本の貸出サービス等のセルフ化　など

博物館
- 自然・人文博物館のリニューアルの検討
- 博物館教育普及活動の推進、学習機会の提供　など

美術館
- 美術館展覧会の充実
- 知的好奇心を育成し充足させる教育普及活動の推進 など

柱7 社会変化に即した教育環境

施策15 学校の安全・安心の推進

- 学校の施設整備・維持管理
- 体育館照明のLED化　など

施策16 児童生徒の減少等に対応した学びの環境整備

- 教育環境の整備推進　など

施策17 教育の質の向上に向けたICTの活用推進

- GIGAスクールの推進　など

施策18 学校・家庭・地域の連携による教育力の向上

- 学校運営協議会の設置・推進
- キャリア教育の推進　など

施策19 経済的理由に左右されない学びの機会均等

- 就学の援助
- 奨学支援金の支給　など

柱8 学び続ける教職員

施策20 教職員の資質・能力の向上

- 教職員の研修
- 教育研究所におけるカリキュラムセンター機能の充実　など

施策21 教職員の働き方改革の推進

- 教職員の働き方改革の推進
- 校務の情報化推進　など

参考資料２

横須賀市学力向上推進プラン

令和４年度（2022 年度）～ 令和７年度（2025 年度）

横須賀市教育委員会

はじめに

（１）策定の趣旨

本市の学力向上に資する「横須賀市学力向上推進プラン」は、「横須賀市教育振興基本計画（令和４年度～令和 11 年度）」およびその「前期実施計画（令和４年度～令和７年度）」に基づく個別計画であり、本市の学校と教育委員会が児童生徒の学力向上のための目標および目標指標を共有し、今後、各学校が学校運営方針等に具体の取り組みを計画し実施できるよう策定しました

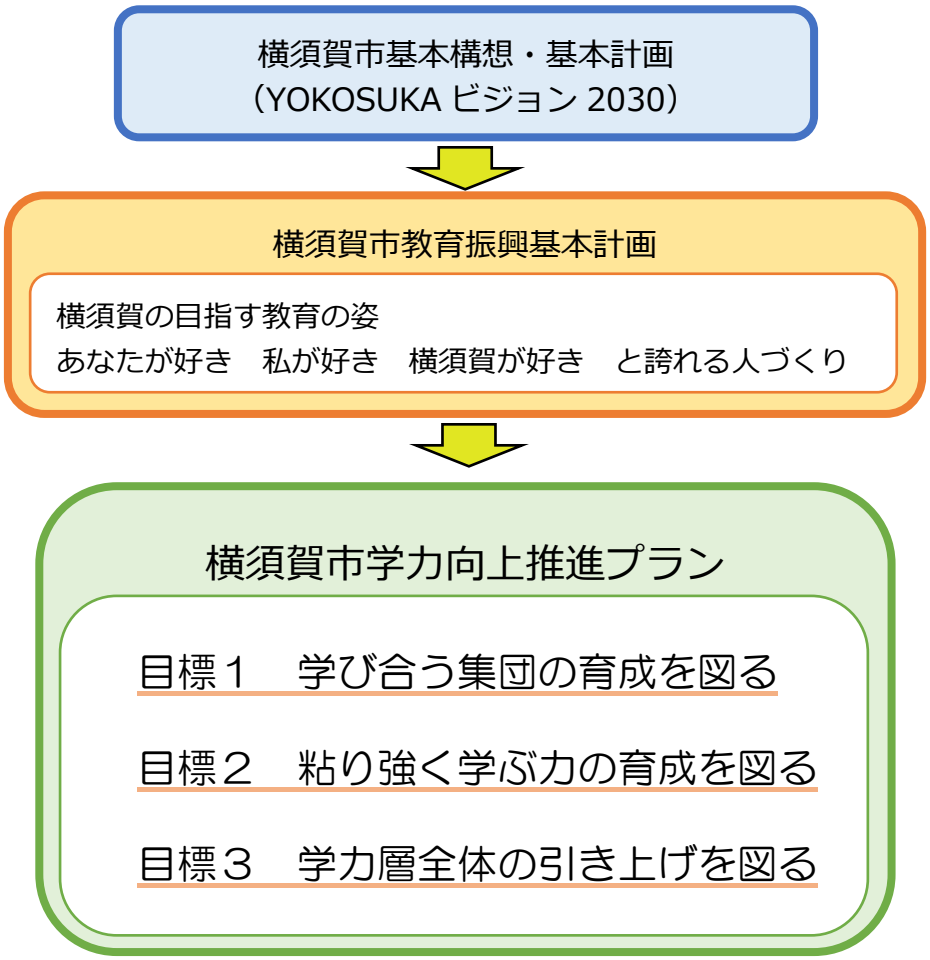
（２）基本方針

① 本計画の目的は、「横須賀市教育振興基本計画」に示す、横須賀の目指す教育の姿「あなたが好き　私が好き　横須賀が好き　と誇れる人づくり」を実現するための基本的な方針「自立心と主体性のあるより良い社会の創り手を育てます」の柱である「確かな学力」を育成することです。

② 本計画は、令和２年度の「学力向上推進委員会」が示した「学力向上推進プランにおける目標①から⑤に係る検証について」の答申と、令和３年度の「学力向上推進委員会」が示した目標および目標指針に基づいて策定しています。

③ 本計画の期間は、令和４年度から令和７年度とします。

学力向上推進プランの位置付け



（３）前推進プラン実施の成果と課題による、これからの学力向上推進の方向性

平成 30 年度から実施した学力向上推進プランの目標の検証において、市の児童生徒の学力の状況について、**「学年が上がるにつれて学力の向上が見られ、子どもの学力は発達段階にしたがって育成できている」**ことや、**「一定の割合で学力に課題のある児童生徒が存在しており、その割合が減少していない」**ことが分かりました。

そのような状況を受け、今後の市における学力向上の取り組みの方向性として、次のような視点を重視することとしました。

- 児童生徒の個に応じた指導の充実を図るとともに、全ての児童生徒が授業の内容を理解し、授業に主体的な態度で臨むことができる指導方法の工夫・改善を行うこと。
- 授業の中で、児童生徒が自己を生かしたり、他者に対して共感したりしながら学びを深めることを通して、自己肯定感の醸成を図ること。
- 他者の意見をふまえて自分の考えを表現したり、一歩進んだ課題に向かっていこうとしたりすることで学びが深められるような、探究的で協働的な授業実践を行うこと。
- 学びに対してあきらめずに粘り強く取り組もうとする力や、うまくいかないことも工夫して達成しようとする力など、学びに向かう力の育成を図ること。

このような視点からの取り組みを進め、各学校における学力向上の推進を図るために、新しい学力向上推進プランの目標を次のとおり設定しました。

目標１　学び合う集団の育成を図る

全ての児童生徒が、授業に主体的な態度で臨むことができ、互いの意見を尊重し合いながら、協働し学びを深めていける学び合う集団の育成を図る。

目標２　粘り強く学ぶ力の育成を図る

これまでに習得した知識および技能や、身に付けた思考力、判断力、表現力等を児童生徒が自ら活用し、学びに対してあきらめずに粘り強く取り組もうとしたり、うまくいかないことも工夫して達成しようとしたりする学びに向かう力の育成を図る。

目標３　学力層全体の引き上げを図る

目標１、２の視点による授業実践や指導の改善にくりかえし取り組むことで、全ての学力層の引き上げを図る。

横須賀市の学力向上に向けた目標および目標指標と、学力向上に向けた各学校の取り組みについて

学力向上に向けた目標および目標指標の捉え方

目標１　学び合う集団の育成を図る

＜目標指標＞

◆主体的・対話的に授業に臨もうとする意識の向上

◆自己肯定感の向上

目標２　粘り強く学ぶ力の育成を図る

＜目標指標＞

◆粘り強く課題に取り組む姿勢の向上

目標３　学力層全体の引き上げを図る

＜目標指標＞

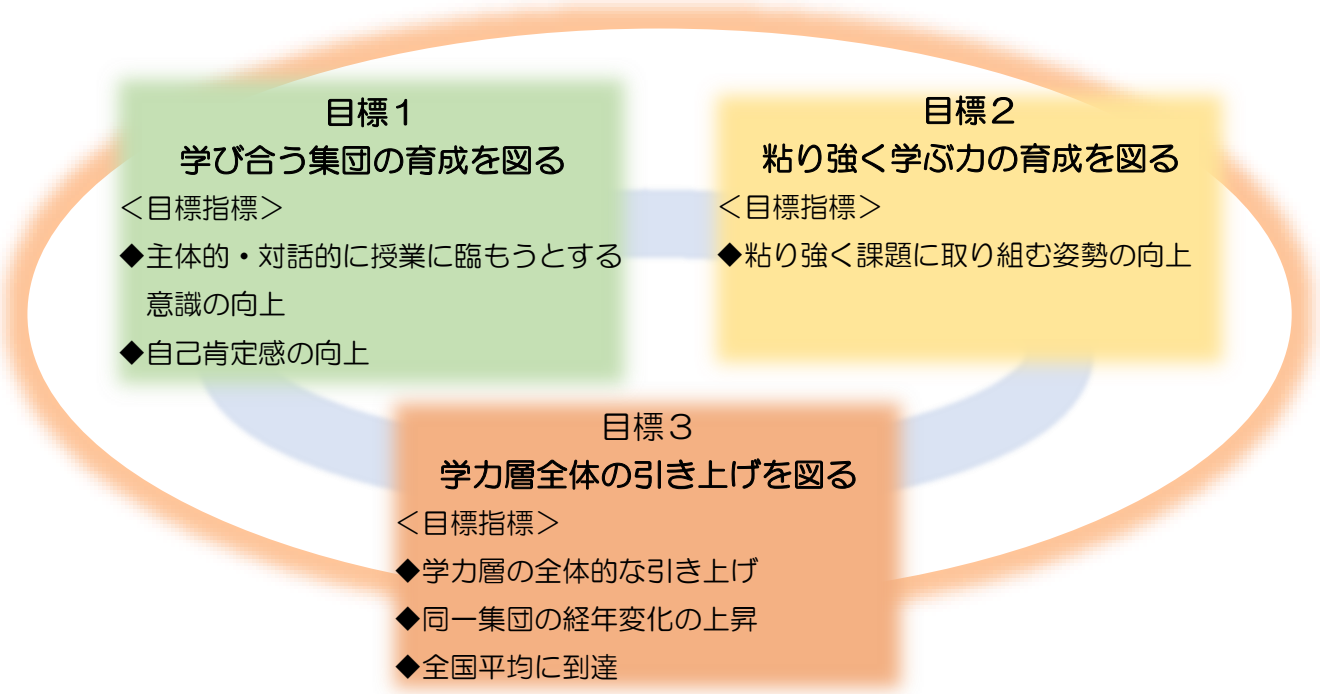
◆学力層の全体的な引き上げ

◆同一集団の経年変化の上昇

◆全国平均に到達

学力向上に向けた目標および目標指標の捉え方

前推進プランの目標指標の分析（参考資料「横須賀市のこれまでの学習状況と分析について」）に基づき、これからの横須賀市の学力向上に向けた取り組みの目標および目標指標を次のように定めました。



３つの目標の捉え方

変化が激しく、予測困難な時代においても通用する「確かな学力」を身に付けるためには、学びに対して主体的に取り組み、自分の良さや個性を生かすとともに、他者の多様な価値を認め、協働し合うような経験が大切です。また、自らの学びを調整したり、あきらめずに粘り強く学ぼうとしたりする力の育成が重要になります。

目標１では、児童生徒が主体的・対話的に臨み、自分のことを大切な存在だと実感できるような授業づくりを通して、**学び合う集団の育成**を図ります。目標２では、難しい課題に対しても工夫して解決しようとする経験や、一人でもあきらめず課題にチャレンジする経験を積むことを通して、**粘り強く学ぶ力の育成**を図ります。この目標１・目標２の視点による授業実践や指導の改善を繰り返すことによって、学び合う集団の育成や、児童生徒一人一人の力の育成が図られ、目標３の**学力層全体の引き上げ**につながっていきます。

３つの目標はそれぞれが独立しているわけではなく、密接に関連し合っています。３つの目標のつながりを意識して、各学校の実情や児童生徒の状況に合わせた取り組みを進めましょう。

目標１

学び合う集団の育成を図る

●●　目標について　●●

「学び合う集団」とは、児童生徒が自分の良さや可能性を認識して個性を生かしつつ、多様な他者を価値のある存在として尊重し、仲間と協働して様々な課題を解決していく集団です。

「児童生徒が主体的・対話的に授業に臨む」「児童生徒が自分のことを大切な存在だと実感できる」という視点をもちながら授業をつくることで、児童生徒の学びに向かう意識や自己肯定感が高まります。このような授業によって「学び合う集団」の質が向上し、児童生徒の学びを深めます。

●学力向上に向けた各学校の取り組みについて●

児童生徒が主体的・対話的に臨む授業づくり

児童生徒の学力向上においては、児童生徒が学びを自分事として捉え、主体的・対話的に授業に参加しようとする意識を高めることが大切です。それが、知識および技能の習得や、思考力・判断力・表現力等の育成へとつながります。

児童生徒の意識を高めるには、例えば、グループワークや話合い活動を目的や状況に応じて取り入れ、自分の意見を表現したり他者の意見に共感したりしながら、自分の考えを広げたり深めたりすることができたと実感するような場面が必要です。

また、自分たちで課題を設定し、仲間と解決しようとするような、探究的で協働的な単元・題材計画を立てることも効果的です。このような学習経験を通して、新しい考え方や他者と関わることの良さに気づき、自らの学びを深めることができたという手応えを積み重ねることで、次の学びへの意欲を引き出します。

児童生徒の学び合い、高め合おうとする意識を向上させるために、互いの意見を尊重し合いながら、協働し、学びを深める授業を実践していきます。

自分のことを大切な存在だと実感できるような授業づくり

これまで市が行った意識調査や市学習調査の質問紙調査の結果から、自己肯定感と学習意欲には相関があることが明らかとなっています。

児童生徒の自己肯定感を高めるには、「認められている」と実感するような経験が

重要です。誰かが発した疑問や意見について、みんなで真剣に考えたり、共感したりするような授業づくりが大切です。

特にグループワークや話合い活動では、何のために話し合っているのか分からないような状況にならないように、活動のねらいに即した支援を行い、他の児童生徒と意見交換したり、協議したりできるようにすることが大切です。また、「こんなことを言ったら、『間違っている』と否定されてしまうのではないか」と不安にならないように、それぞれの個性や学び方を尊重し、全ての児童生徒の自己肯定感を高める授業づくりを行います。

目標指標　◆主体的・対話的に授業に臨もうとする意識の向上

市学習調査（小５・中２）
「授業等の話し合いの活動で、自分の意見を広げたり、深めたりできているか」
「みんなで課題を解決する場面で協力しようとしているか」

指標	基準値	目標値
市学習調査の質問紙調査にて、小5・中2の「授業等の話し合いの活動で、自分の意見を広げたり、深めたりできているか」の肯定回答率が、同一集団の前年度値（小4・中1時）を上回っているか。	小4・中1時の肯定回答率	毎年その前年度を上回る
市学習調査の質問紙調査にて、小5・中2の「みんなで課題を解決する場面で協力しようとしているか」の肯定回答率が、同一集団の前年度値（小4・中1時）を上回っているか。	小4・中1時の肯定回答率	毎年その前年度を上回る

目標指標　◆自己肯定感の向上

市学習調査（小５・中２）「自分のことを大切に思うことができるか」

指標	基準値	目標値
市学習調査の質問紙調査にて、小5・中2の「自分のことを大切に思うことができるか」の肯定回答率が、同一集団の前年度値（小4・中1時）を上回っているか。	小4・中1時の肯定回答率	毎年その前年度を上回る

目標２

粘り強く学ぶ力の育成を図る

●●　目標について　●●

授業においては、教師の指示や説明に沿って展開するだけの指導や、正解にたどりついたかどうかという視点だけで児童生徒を評価していては、「粘り強く学ぶ力」の向上は図れません。

これまでに習得した知識および技能や、身に付けた思考力、判断力、表現力等を児童生徒が自ら活用し、挑戦しがいのある課題に対して最適解を見出そうとチャレンジする学習経験と、一人一人が試行錯誤しながら学ぶ姿に焦点を当てた学習評価が、児童生徒の「粘り強く学ぶ力」を育てます。

●学力向上に向けた各学校の取り組みについて●

難しい課題に対しても工夫して解決しようとする経験

「難しい課題」とは、児童生徒の可能性や能力を一歩高めるような挑戦的な課題です。粘り強く学ぶ力の向上を図るためには、そのような課題に対してもあきらめずに工夫して解決しようとするような経験を積ませることが重要です。

探究的な学習活動や協働的な体験活動を通じて、児童生徒自身が、それまでの学びを振り返り、次の学びへの見通しをもったり、より良いものを目指して試行錯誤したりするような、学びを調整する場面を含む単元・題材計画や、評価計画が必要です。その学びの過程での教師による評価（授業内での言葉がけや、ノートへのコメント等）や、その学びを通して得た成功体験は、自己肯定感の向上を支えます。

一人でもあきらめず課題にチャレンジする経験

市学習調査の結果の分析から、「目的や意図に応じて、理由を明確にしながら、自分の考えをまとめて書く」ことについて課題があることが分かりました。一人一人の児童生徒がどのように解答しているのかを分析してみると、無解答率の高さが顕著となっています。

グループで課題を解決する学習活動においても、個々の学ぶ力がどう向上している

かを見取ることは大切です。グループ活動に入る前に、自分なりの考えをまとめてみることや、グループ活動が終わった後で、自分の考えの変容や友だちから学んだことを一人一人が言語化することも重要です。

そして時には、これまで学んだことを使って自分一人の力で取り組む課題も必要です。その場合、たとえ課題の解決にはたどり着けなくても、粘り強く考え、これまでの学びを生かしてチャレンジしようとした姿勢を積極的に評価しましょう。そうした経験を繰り返すことで、一人一人のあきらめずに学びに向かう力が向上します。

目標指標　◆粘り強く課題に取り組む姿勢の向上

市学習調査（小５・中２）「難しい課題にも挑戦して取り組もうとするか」

指標	基準値	目標値
市学習調査の質問紙調査にて、小5・中2の「難しい課題にも挑戦して取り組もうとするか」の肯定回答率が、同一集団の前年度値（小4・中1時）を上回っているか。	小4・中1時の肯定回答率	毎年、その前年度を上回る

市学習調査（小５・中２）「記述により解答する問題の無解答率」

指標	基準値	目標値
市学習調査にて、小5・中2の記述により解答する問題の無解答率が、同一集団の前年度値（小4・中1時）を下回っているか。	小4・中1時の無解答率	毎年、その前年度を下回る

目標３

学力層全体の引き上げを図る

●●　目標について　●●

目標１・目標２の視点による授業実践や、指導の改善を繰り返すことによって、学び合う集団や児童生徒一人一人の力の育成が図られ、結果として目標３の学力層全体の引き上げにつながっていきます。

３つの目標はそれぞれが密接に関連し合っています。目標３の数値結果を分析する際には、目標１・目標２の取り組みとのつながりの中で児童生徒の姿を見つめ直し、児童生徒一人一人の学習状況に応じた指導の改善につなげ、学力層全体の引き上げを図ります。

●学力向上に向けた各学校の取り組みについて●

個に応じた指導の充実

学力層の全体的な引き上げを図るためには、目標１・２に示したような授業改善を進めつつ、個に応じた指導の充実を図ることが重要です。

児童生徒の学びを１時間単位ではなく、単元や題材全体を一連の学びとして捉え、長期的な視点で一人一人の学び方に目を向ける指導が求められています。

個に応じた指導の充実に当たっては、児童生徒や学校の実態に応じ、個別学習やグループ別学習、学習内容の習熟の程度に応じた学習、児童生徒の興味・関心等に応じた課題学習、補充的な学習や発展的な学習などを取り入れること、ＩＣＴ等教材教具の活用、教職員間の協力による指導体制を確保することなど、指導方法や指導体制の工夫改善が必要です。

また、難しい課題に対して挑もうとしたり、一人でもあきらめず課題にチャレンジしたりしようとする児童生徒に寄り添い、つまずきそうなことを予想しながら適切な支援を行うことは、一人一人の学びの成功体験を支えます。

同一集団の経年変化を追い、各学年の状況を分析

同一集団の経年変化を追うことで、児童生徒の学習集団としての成長を可視化し、長期的な視点から指導の成果や課題を捉えることができます。調査を行う全ての学年において、前年度からの学習集団としての成長を分析することが重要です。

各学校においては、各学年における学力向上の取り組みの成果や課題を分析し、児

童生徒の実態に合わせた指導の充実や改善を図ります。

なお、これまでの市学習調査の結果では、小４・中１の学習内容に課題が生まれる傾向があります。そのため、小４・中１の内容を取り扱う小５・中２時の調査の結果については、特に丁寧な分析が必要です。

また、小中一貫教育に関する取り組みにおいて、全国学力調査および市学習調査の結果を交流し課題やその解決策を見出す中で、小学校高学年と中学校１・２年生の学習を一体として捉えた取り組みを行うことも重要です。

全国との比較による、身に付けている学力の定着状況の確認・分析

全国学力調査では、学習指導要領の理念・目標・内容等に基づき、全ての児童生徒に身に付けさせるべき内容を調査問題として出題しています。全国的な児童生徒の学力との比較をすることで、身に付けさせるべき内容の定着状況を確認・分析するために、目標指標として設定しました。

各学校においては、平均正答率が全国の平均に到達しているかどうかの分析だけでなく、設問ごとに正答率の分析を行い、全国の状況と大きくかけ離れている設問や、例年、学校の中で課題として捉えている設問について検証を行うなどし、指導の充実や改善を図ります。

目標指標　◆学力層の全体的な引き上げ

市学習調査（小５・中２）「正答率 40%未満の児童生徒の割合」

指標	基準値	目標値
市学習調査にて、小5･中2の正答率 40%未満の児童生徒の割合が、同一集団の前年度値（小4･中1時）を下回っているか。	小4･中1時の割合	毎年、その前年度を下回る

市学習調査（小５・中２）「正答率８０%以上の児童生徒の割合」

指標	基準値	目標値
市学習調査にて、小5･中2の正答率80%以上の児童生徒の割合が、同一集団の前年度値（小4･中1時）を上回っているか。	小4･中1時の割合	毎年、その前年度を上回る

目標指標　◆同一集団の経年変化の上昇

市学習調査（小５・中２）
「市の平均正答率の割合が、同一集団の前年度の数値を上回っているか」

指標	基準値	目標値
市学習調査にて、小5・中2の*市の平均正答率の割合が、同一集団の前年度値（小4・中1時）を上回っているか。	小4・中1時の割合	毎年、その年度を上回る

*市の平均正答率の割合…全国の平均正答率を基準とした市の平均正答率の割合

目標指標　◆全国平均に到達

全国学力調査（中３）「国語・数学が、全国の平均正答率に到達しているか」

指標	基準値	目標値
全国学力調査にて、中3の国語・数学が全国の平均正答率に到達しているか。	中3の全国の平均正答率	全国の平均正答率を上回る

横須賀の目指す
教育の姿

あなたが好き　私が好き　横須賀が好き　と誇れる人づくり

横須賀市教育振興基本計画　方針１「自立心と主体性のあるより良い社会の創り手を育てます」

柱１「確かな学力」

学力向上推進プラン

横須賀の全ての児童生徒に「確かな学力」の育成を図る

目標１　学び合う集団の育成を図る

目標指標

◆主体的・対話的に授業に臨もうとする意識の向上

◎市学習調査にて、小５・中２の「授業等の話し合いの活動で、自分の意見を広げたり、深めたりできているか」「みんなで課題を解決する場面で、協力しようとしているか」の肯定回答率が、同一集団の前年度値（小４・中１時）を上回っている。

◆自己肯定感の向上

◎市学習調査にて、小５・中２の「自分のことを大切に思うことができるか」の肯定回答率が、同一集団の前年度値（小４・中１時）を上回っている。

目標２　粘り強く学ぶ力の育成を図る

目標指標

◆粘り強く課題に取り組む姿勢の向上

◎市学習調査にて、小５・中２の「難しい課題にも挑戦して取り組もうとするか」の肯定回答率が、同一集団の前年度値（小４・中１時）を上回っている。

◎市学習調査にて、小５・中２の記述により解答する問題の無解答率が、同一集団の前年度値（小４・中１時）を下回っている。

目標３　学力層全体の引き上げを図る

目標指標

◆学力層の全体的な引き上げ

◎市学習調査にて、小５・中２の正答率40%未満の児童生徒の割合が、同一集団の前年度値（小４・中１時）を下回っている。

◎市学習調査にて、小５・中２の正答率80%以上の児童生徒の割合が、同一集団の前年度値（小４・中１時）を上回っている。

◆同一集団の経年変化の上昇

◎市学習調査にて、小５・中２の*市の平均正答率の割合が、同一集団の前年度値（小４・中１時）を上回っている。

*市の平均正答率の割合…全国の平均正答率を基準とした市の平均正答率の割合

◆全国平均に到達

◎全国学力調査にて、中３の国語・数学が全国の平均正答率に到達している。